

閩南語効撰一等字の文白異読について

樋 口 靖

§1、はじめに

閩南語効撰一等字（豪、皓、号韻）の大多数の読音は伝統的な取り扱い方によれば文言音で-o、白話音で-auである。例えば、「草」は文言音では^cts'o、白話音では^cts'auと読まれる。しかし、小数の例外もあって、例えばCampbell (1913) の記述によれば「嫂」の文言音は^csoであり、白話音は^csoである。また例えば「膏」の読音は、文言音で^cko（潤沢の意味）、白話音で^cko (^cko-io²膏藥) であり、その外に^ckau (^ckau-²liang膏梁)、Campbell (1913) では白話音扱い) もある¹⁾。「高」の文言音は^ckoであり、その白話音は^ckau (^ckau-hieng⁹高興) であるが、^cko (^cko-^ctai-^ctsi高擡錢²⁾、Campbell (1913) では白話音扱い) もある。これらの字の韻母を見るとその文白による分布は複雑で対応が整然としていないことがわかる³⁾。

	文言	白話	白話
草	-o		-au
嫂	-o	-o	
膏	-o	-o	-au
高	-o	-o	-au

文言音は本来文言文を読誦する際の個々の漢字の読音であるから、原則として1種類の読音をもつのみである。したがって、もし別の新しい読音が文言音として移入されることがあれば、かつて文言音であったものでも、みずから白話音の地位に落ちなければならないことがある。「嫂」

の^csoが字音として新しく移入された文言音であるとすれば、^csoはかつて文言音の地位を占めていたことになる。これに対して「膏」と「高」の白話音^ckoは個別の単語の形式として借用されたために、未だ文言音の地位に昇ることが出来ないでいると解釈される。「膏梁」と「高興」はともに明らかに官話音からの借用と見られるから、この中の「膏、高」の韻母-auは「草」等の字の白話音-auとは来源の全然異なるものである。

言い換えると、「草、嫂、膏、高」4字の韻母における-oはそれが文言音であるか白話音であるかに関りなく、すべて同一の言語層に所属するのであり、「草」と「膏、高」における-auは発音が同じであるにもかかわらず前者と後者では別個の言語層に所属するものであるように見える。ところが、「嫂」と「膏、高」に現れる-o音は、文白系統における地位は異なるけれども、語音層としては同一層に所属するものであるように見える。

そもそも効撰はその一等から四等まで閩南語文白音系統との対応関係において最も単純な撰の一つである。にもかかわらず、特にその一等字の文白異読の現れかたに単純でない点が存在する⁴⁾。拙論の目的は、効撰一等字の閩南語文白異読における現れ方の観察を通じて、幾つかの言語層の入り交じり現象を分析してみることにある。

§ 2、豪韻における文白異読の取り扱い方

閩南語において豪韻字の文白異読はこれまでどのように処理されてきたのであろうか。「十五音」⁵⁾では大多数の字が文言音として『高韻』に登録されている。その読音は-oである。少数の字が交韻に登録されている。その読音は-auである。「十五音」『交韻』に現れる豪韻字とその読音は以下の如くである。

	交韻		cf. 高韻
尻	c'k'au		
糟	ctsau (酒～)	ctso	(酒滓)
繰	cts'au		
操	cts'au (～練)	cts'o	(～持)
蚤	'tsau (狡～)	'tso	(齧人跳虫)
草	'ts'au (花～)	'ts'o	(百卉総名、又～創、 ～稿、～書、又苟簡 曰～～)
竈	tsau ^o (炊飯具)	tso ^o	(駕車炊者)
掃	sau ^o (帚也)	so ^o	(除穢棄也)
懊	au ^o (～惱)	o ^o	(悔恨也、～惱也)
袍	ɛpau		
抱	p'au ² (持也、 引取挾也、懷～也)	p'o ²	(挾也、懷也)

前述のように、Douglas (1899) と Campbell (1913) の取扱方も「十五音」と同様に、-o を読書音として、豪韻字-au音のほとんどを白話音としている。また、羅常培 (1931) も基本的には-o を文言音と見なし、-au を白話音と見なしている。要するに伝統的に-o韻母は文言的用法であり、-auは白話的用法である。しかし、文言音-oをそのまま文読層に属するとし、白話音-auをそのまま白話層に属するものとするかどうかはまた別の問題である。例えば、楊秀芳 (1982) は-au韻母は文読系統に属するものであり、-o韻母こそ白話系統に属するものであると考えている。その理由は、効摂二等肴韻、三等宵韻、四等蕭韻の文白音は、

	例字	文読	白読
二等	膠	-au	-a
三等	焼	-iau	-io
四等	釣	-iau	-io

の如くであり、これと一等豪韻の2種の韻母を比較し、-auを文読音とすれば文読音の系統がずっとすっきりするし、また、白話音となる-oは宵、蕭韻の-ioと「同韻異等」の関係になることにある。このほか余靄芹(1982)も「廈門は遂溪と同様に文読は-auあるいは-iau、白読は-oあるいは-ioである」とした。その理由は閩方言効撰白読は外転であり、そのため韻尾が主母音に吸収されるか或は脱落していると考えられているのである。

§3、閩南語豪韻韻母の分析

(1) -au韻母

王育徳先生(1987)は閩南語豪韻の-au音を白話音と認め、これらが広母音-a-を保存することと、韻尾-uが健在であることから、中古音を比較的忠実に反映したものであると考えた。そして、慧琳音義の反切、唐五代西北方音、宋代卡洛音が何れもauの形であるところから、「おそらく閩中方言圏から入植した開拓民によって齎されたものであろう」と述べられた。筆者もまた王先生と同様に閩南語豪韻の-au音は基本的にはやはり白話音の韻母であると考えたものである。但しその理由は先生とは多少異なる。私見では、豪韻-auの一部は官話からの借用音であるが、その基幹部分は王先生の考えよりも更に古い語音層の残留であると考えた。およそ、豪韻字は上古幽部と宵部に淵源する。そして閩南語で-auに読まれる字の重要部分は幽部に所属している(黄典誠1982、余靄芹1982)。例えば、

袍	<i>c</i> tng-p'ai ²	(長袍)
抱	<i>pau</i> ² -ciəŋ	(撫養する)
老	<i>lau</i> ² -laŋ	(老人)
糟	<i>c</i> tsiu-tsau	(酒糟)
蚤	<i>c</i> ka-c ² tsau	(蚤)
竈	<i>c</i> tsau-c ² k'a	(台所)
草	<i>c</i> ts'au-tue ²	(田舎)
掃	<i>c</i> piā-sau ²	(掃除する)

等はすべて幽部字であり、しかも口語常用字として用いられる。これに対して、宵部字としては「高、操、到」等があるが、これらはすべて官話からの借用語に現れ、官話音であると解釈され、その用法も書面語的である。

例えば、

毛	<i>māu</i> -piəŋ ²	(欠点)
高	<i>kau</i> -hiəŋ ²	(嬉しい)
膏	<i>kau</i> -liəŋ	(コーリャン)
操	<i>c</i> t'e-c ² ts'au	(体操)
到	<i>tau</i> ² -c ² te	(とうとう)
腦	<i>c</i> t'au-c ² nāu	(頭脳)
惱	<i>au</i> ² -c ² nāu	(悩む)

李方桂 (1980) の再構音によれば上古幽部一等の韻母は-əgwであり、上古宵部一等の韻母は-agwである。また、張琨 (1984) では幽部-əug、宵部-augである。いずれにしても、主母音-ə-と-a-の対立は上古音における内外転の対立と見て構わない。一般に内外の区別は「主母音の強弱として反映する (頼惟勤1957)」。内転系の音節は主母音が弱く韻尾が強いのに対して、外転系の音節は主母音が強く韻尾が弱い。従って、幽部に由来す

る-au音字は強い韻尾が主母音に吸収消滅されるのに抵抗して残留した形式であると考えられる。そして、この-auを含む口語形式は廈門語のみならず泉州系、漳州系閩南方言および福州語、莆田語、潮州語、海南語⁶⁾すべてに存在する極めて強固な基礎的白話語彙を形成している。結論として、官話音に由来するものを除けば、閩南語豪韻字のうち-auに読まれるものは上古音的語音層を保存するものであることが解る。

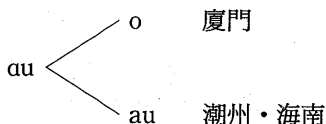
(2) -o韻母

上述の白話音-auが上古音の遺留形式であるとする、豪韻-o韻母は文読系統に属することになり、この点では伝統的取り扱いと変わらない。そしてこの-oは-auより新しい時代層を反映した形式であるはずである。なぜなら、上の余霽芹(1982)説を認めるならば、-o音の形成は、上古幽部と上古宵部が一つに合流して中古豪韻*-auが形成された後でなければならぬ。すなわち、外転としての豪韻の強い主母音-aに弱い韻尾の-uが吸収されるか或は脱落したと考えるのが合理的だからである。

しかしこの文読者-o韻母は均質なものではなく、少なくとも二つの言語層を含む可能性がある。その理由は二つあって、ひとつは他の方言との比較によるものであり、もう一つの理由は、そのように考えると音系の内部的整合性を満足させることが出来ることにある。

1) 潮州語、海南語および漳平(永福)方言等の豪韻では-o音字は少数派であって白読音とされているのに対して、多量の-au音字が存在し、文読者として扱われている。その中の一部の-au音字(袍、抱、老、糟、蚤、竈、草、掃など)は閩南語と同様の理由を以って上古音の反映であると見られ、また別の一部(毛、高、操、到、腦、惱など)は官話からの借用語であると見られる。ではその他の-au音字(褒、保、堡、宝、褸、暴、帽、冒、叨、禱、島、搗、滔、掏、討、套、濤、陶、道、稻、導、盜、悼、璫、牢、勞、膠、撈、滂、遭、漕、棗、澡、藻、躁、糙、曹、

槽、皂、造、騷、搔、臊、燥、噪、臬、槁、縞、皐、尻、考、靠、犒、熬、傲、蒿、薨、好、耗、豪、壕、毫、号、浩、皓、襖、澳、奧、懊など）はなにかというに、これこそが王育徳先生のいわゆる「中古音の比較的忠実な反映」であって、閩祖語 *-au (Chang Kuang-yu, 1986) の音形を直接に継承するものではないかと思う。そしてこのグループの上に官語音からの借用形がその音相が同じであるか或は極めて近似した為に overlap してして形成されたのがすなわち潮州語、海南語の文言音韻母-au であると考ええる。この文言音-au は廈門語には残っていない。しかし、これは明らかに廈門の文言音-o に相当するものである。すなわち、



潮州・海南の-auが、廈門の-o韻母に対応するとすれば、潮州・海南の白話音韻母-oはなにか。例えば、潮州語で-o韻母をもつ字は「保、堡、宝、報、抱、毛、帽、刀、倒、討、陶、逃、桃、淘、萄、牢、棗、草、槽、嫂、高、膏、糕、稿、告、好、耗、号」等であるが、これらはやはり廈門語の-o韻母に当たると見なさざるをえない。しかも、潮州・海南語でこれらが白話音として扱われている事実から、廈門語においてもこれらのグループは文言音の中でも相対的に古い言語層を反映しているのではないかと考えられる。すなわち、潮州・海南における文言音-auと白話音-oはともに廈門語では文言音-oに相当し、この両者の区別は閩南語文読音の中にかつて新旧二層が存在したことを想像させるのである。

2) 効摂二等肴韻の文読は-auであり、白読は-aである。これを一等豪韻と対比すると、

	廈門		潮州	
	文	白	文	白
一等豪韻	-o	-au	-au	-o
二等肴韻	-au	-a	-au	-a

となるが、我々はすでに廈門の白話音-auを上古的音形の残余であると考えたのでこれを排除し、文言音中の旧層の-oを-o α として（新層の-oを-o β とする）、白話音の位置に置いてみると、

	廈門		潮州	
	文	白	文	白
一等豪韻	-o β	-o α	-au	-o α
二等肴韻	-au	-a	-au	-a

となる、この時、廈門と潮州の白話音-o α は、一等の祖語*-auがその韻尾を吸収脱落させた形式で伝承されたものであり⁷⁾、それに対して、二等韻の-aは祖語-auがその韻尾を脱落させた形式で伝承されたものである。このように解釈すれば、文白音の系統は極めて整合的になる。

以上をまとめると、閩南語豪韻の言語層は少なくとも四層を含み、古い順に最古層の-au（白話）、旧層の-o（文言 α 層）、新層の-o（文言 β 層）、官話層の-au（白話）となる⁸⁾。

§4、泉州音との比較

泉州方言における豪韻字は3種類の文白韻母を持っているようである。泉州方言最古の語音資料たる「彙音妙悟」⁹⁾に拠れば、これらの字は「高韻」-o、「刀韻」-o、「郊韻」-auに所属している¹⁰⁾。この内、「郊韻」は効韻文言音、侯・尤韻白話音等を含むが、ほかに「老、袍、糟、竈、掃、草、操」の七個の豪韻字も含み、すべて「解」、「俗」、「土」の字様を付してこれらが白話音であることを注記している。またこれらはその他の閩南

方言に-au音で現れるものと同じ形態素であり、従って先の議論によって上古音の遺留であることは問題ない。彙音妙悟「刀韻」は「此一音俱從土解」すなわち白話音専用韻であり、中に歌戈韻と豪韻が含まれる。「高韻」には模魚韻、歌戈韻および豪韻字が含まれる。「刀韻」中の豪韻字は54字、「高韻」中の豪韻字は158字でほとんどすべての豪韻字がここに所属しており、後者は前者の約3倍である。両方に重複して現れる豪韻字は「褒、宝、保、堡、報、刀、倒、逃、萄、淘、道、到、討、桃、套、璫、腦、遭、棗、槽、曹、造、草、騷、嫂、燥、躁、羔、糕、膏、高、稿、藁、告、犒、毫、襖、輿」の38個の常用字である¹¹⁾。三読する字は、「草」一字だけである。

高韻	刀韻	郊韻
草 °ts'ɔ (~木、~創)	°ts'o (++)	°ts'au (~仔)

これらの用字法から見て「高韻」所属字は明らかに文言音として扱われている。-ɔ音が文言音として現れ、-o音が白話音として現れるこのような現象は、ただ「彙音妙悟」ばかりではなく、南安、永春、同安等の県における現代泉州系閩南語すべてに反映しているようである。そればかりでなくこの現象は泉州に隣接する莆田・仙游方言にも及んでおり、泉州府、興化府に共通する現象であるらしい。

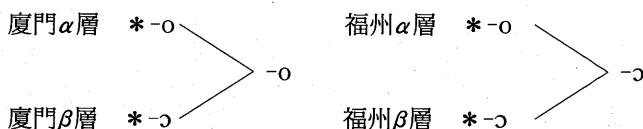
問題は泉州方言における-ɔ、-o音が廈門等その他の閩南方言のどの語音層に相当するかということである。泉州方言におけるこのような文白音の分布を観察してこれを廈門音のそれと対比してみれば、泉州文言音-ɔは廈門の文読β層（新層の-o、潮州の文言音-au）に対応し、泉州白話音-oは廈門の文読α層（旧層の-o、潮州の-o）に対応することは明らかである。すなわち、廈門語で文言音としてoverlapしてしまった新旧二層の-o音は、その新層は潮州では-auで現れるのに対して泉州では-ɔで現れる。その旧層は潮州では-oで現れるが泉州でもやはり-oで現れる。

	廈門	潮州	泉州	
β層	-o	-au	-ɔ	(禱)
α層	-o	-o	-o	(刀)
古層	-au	-au	-au	(竈)

この現象に関連して考えておかねばならないことが二つある。ひとつは、福州音における豪韻字のほとんどすべてが、-ɔに読まれる事実である。言い換えれば、福州の-ɔは廈門の-oに対応している。この両者の豪韻字韻母の音価の違いは次のように図式化出来る。すなわち、廈門の文読β層の-oは泉州・興化では-ɔに読まれ、福州でも-ɔに読まれる。これに対し福州の文読α層の-ɔは泉州・興化では-oに読まれ、廈門でも-oに読まれる。

	廈門	泉州・興化	福州
β層	-o	-ɔ	-ɔ
α層	-o	-o	-ɔ

前述の如く、α層の-oは閩南祖語の-auがその韻尾を吸収域は脱落して単母音化したもので、廈門、潮州、泉州すべて-oという閩南語で一致した形式で現れており、極めて安定していると言える。これに対して、純然たる文言音としてのβ層は廈門-o、泉州-ɔ、潮州-auというバラバラの形式で現れている。これは、廈門では、かつて泉州のように-ɔに読まれていたβ層の豪摂字がα層の-o音に合流し、福州では逆に-oに読まれていたα層の豪摂字がβ層へ合流したと推測される¹²⁾。



このような合流はどの時点で起こったのであろうか。それは、果摂一等字との統合が完成した後のことであると思う。中古歌戈韻の非円唇後舌母

音 * -a は中世音では円唇母音 * -o に変化したが、閩語における歌戈韻文言音は北宋時代には確実に円唇母音に読まれており、豪韻文言音と合流していた（王育徳、1987）。但しその音価が -o であったか -ɔ であったかは決定出来ない。しかし、とにかく閩南語において歌戈韻文言音と豪韻文言音は以後行動を共にすることになった。

「彙音妙悟」では、歌戈韻字が文言音として豪韻と共に「高韻」に所属するのみならず、白話音として「刀韻」にも所属している。例えば、

高韻	刀韻
波 cpo (水～)	cpo (～浪)
妥 t'o ³ (～當)	t'o ³ (～當)
鑼 ɔlo (樂器)	ɔlo (銅～)
梭 cso (手爬)	cso (～仔)
歌 cko (謳～)	cko (～曲)
和 ɔho (順也、平也)	ɔho (～好)

すなわち、泉州では歌戈韻字と豪韻字はそれぞれ合併して文言音「高韻」、白話音「刀韻」という対立を構成している。泉州音におけるこの事実は、古閩南語において、歌戈・豪韻白話音 -o と歌戈・豪韻文言音 -ɔ とがすでに形成されていたことの反映であろう。泉州ではこの区別が保持されて現在に至っているが、廈門においては両者の音価があまりに近似していたために混同が起り、-o ひとつに統合されて全体として文言音に成り上がった。福州では同様の混同が逆の方向に起り、-ɔ に統合されたと解される。

§5、おわりに

閩南語文白異読については既に多くのことが語られている。よく知られているように閩南語の文白音はそれぞれ一つの系統を形成している。しか

し、文読音と白読音の対応関係はそれほど単純なものではなく、文読系統、白読系統内部にそれぞれ古い層と新しい層のoverlapがあり、白話音にも文読層に属するものが交じている可能性があり、その逆もある。文白異読は「時代不同的語言層次現象」であり、「白讀和文讀都可能有幾個層次」(余霽芹, 1982)なのである。

効撮は重韻もなく開合の対立もない最も単純な撮である。その一等豪韻の中古音が後舌母音を主母音とする-au系のものであったことはほとんど疑いない。にもかかわらず閩南語文白異読への反映はかなり複雑である。本論はその事実を音系内部の分析と、近隣方言との比較によって説明しようとした。中でも泉州音は廈門音では消失した語音区別を保存していることが多く、研究上利用価値が高い。豪韻字あるいは歌戈韻字の高韻・刀韻への反映現象はそのひとつである。

註

* 拙論は第三届国際閩方言研討会 (1993年1月11-12日、於香港中文大学) に提出された論文に手を加えたものである。

- 1) $c_{k}au-_{c}liag-_{c}sio$ “膏梁燒”、Douglas(1899) に “a strong sort of spirits” とある。
- 2) $c_{k}o-_{c}tai-_{c}tsi$ “高擡錢”、Douglas(1899) に “large bundles of idolatrous paper (representing money) torn into very long shreds” とある。また、「日台大辞典」には、「 $kim-_{c}gun-_{c}tsua$ “金銀紙” の一種。紙を切り御幣の如くしたもの。芝居の時に掛け打出後焼く」とある。
- 3) 「早」の白話音 ^{c}tsa 、「稻」の白話音 tiu^2 はともに例外。ここでは論じない。「稻」は本字ではあるまい。
- 4) およそ閩南方言の単母音韻にはみな後舌母音 $-o$ と $-ɔ$ がある。 $-o$ (「十五音」の‘高韻’) の主たる來源は果撮一等と効撮一等の字である。 $-ɔ$

「十五音」の「沽韻」の主たる來源は遇撮一、三等および流撮一、三等の字である。果撮、効撮は外転に属し、遇撮、流撮は内転に属するので、両者の対立は極めてはっきりしている。これらの韻に所属する字音は、各地の閩南方言の間で非常に綺麗な対応を見せる。例えば、

例字	廈門	漳州	泉州	潮州	海南
好	-o	-o	-o	-o	-o
補	-ɔ	-ɔ	-ɔ	-ou	-ou

外転果撮の文白異読の現象を見ようとするなら、開口歌韻の文読音は-o、白読音は-uaであり、合口戈韻の文読音は-o、白読音は-uaで、唇音以外の白読音は-e/-ueである。仮撮麻韻二等開口の文白音はそれぞれ-a、-eであり、麻韻二等合口の文白音はそれぞれ-ua、-ueであるから、文言音中の主母aとo、あるいは白話音中の主母音aとeの対立はともに果仮撮における一等と二等の明白な区別を反映している。また、このようない方はそれぞれの閩南方言ではほとんど共通のものである。

例字	廈門	漳州	泉州	潮州	海南
歌 (1等歌韻開口)	-o/-ua	-o/-ua	-o/-ua	-o/-ua	-o/-ua
破 (1等戈韻合口)	-o/-ua	-o/-ua	-o/-ua	-o/-ua	-ua
遇 (1等戈韻合口)	-o/-e	-o/-ue	-o/-ə	-ue	-ue
家 (2等麻韻開口)	-a/-e	-a/-ε	-a/-e	-e	-a/-e
花 (2等麻韻合口)	-ua/-ue	-ua/-ue	-ua/-ue	-ue	-ua/-ue
謝 (3等麻韻開口)	-ia	-ia	-ia	-ia	-ia

しかし、効撮を見るならば、その文白異読の対応関係は果撮のように単純ではない。

- 5) 「彙集雅俗通十五音」会文堂発行。
- 6) 発音資料のソースは、「引用論文」参照のこと。
- 7) カールグレンのいわゆる「-u音変」。

- 8) 文言音のなかに白読系統に属する字が含まれるのは別に珍しいことではない。例えば、咸撰一等「暫」と二等「減」はともに文言音として -iam と読まれるが、しかしそれに対応する白話音は存在しない。その実、これらは白読系統に所属するものである。
- 9) 「増補彙音妙悟」廈門廿四崎脚会文書荘石印本。
- 10) 王育徳 (1970)、姚栄松 (1988) などの再構音はみな一致している。
- 11) ほかに「考、好」などの字が文言者として「莪韻」-ŋに現れる。
- 12) 別の可能もある。すなわち、泉州と興化は福州音の -ʔ を借用して新しい文言音とした。その結果、古い文言音 -o は自分の地位をこの新しい -ʔ に譲って、白話音の地位に降りてしまった。ところが福州の影響力は廈門以南の地域には波及せず、従ってこれらの地点では -ʔ / -o の対立が形成されなかった、とするものである。ただし、いまのところ、この考えは保留する。

引用論文

臺灣總督府 1932 “臺日大辭典”

藍亞秀 1953 “福州音系”、国立臺灣大學文史哲學報、5：241-331

羅常培 1956 “廈門音系”、科學出版社

賴惟勤 1958 “中古中国語の内・外について”、お茶の水大学人文科学紀要、11

李永明 1959 “潮州方言”、北京中華書局

王育徳 1970 “泉州方言の音韻体系”、明治大学人文科学研究所紀要、8-9：1-31

李方桂 1980 “上古音研究”、北京商務印書館

黃典誠 1982 “閩南方言中的上古音殘余”、語言研究、3：172-187

余鷲芹 1982 “遂溪方言裏的文白異讀”、BIHP、53：353-366

- 楊秀芳 1982 “閩南語文白系統的研究”、國立臺灣大學
- 張振興 1982 “漳平（永福）方言同音字匯”、方言、3：203-228
- 張 琨 1984 “論比較閩方言”、BIHP、55：415-458
- 周長楫 1986 “福建境內閩南方言的分類”、語言研究、11：69-84
- 王育德 1987 “台灣語音の歴史的研究”、第一書房
- 姚榮松 1988 “彙音妙悟の音系及其鼻化韻母”、國文學報、17：251-281
- 雲惟利 1987 “海南方言”、澳門東亞大學
- 樋口靖 1990 “海南島崖県の音韻体系”、筑波大学外国語教育論集12：26-42
- C. Douglas 1899 *Chinese-English dictionary of the vernacular or spoken language of Amoy*
- W. Campbell 1913 *A dictionary of the Amoy vernacular*, 臺灣教會公報社
- Wan Joo Tay, Mary 1968 *A phonological study of Hokkien*, University of Edinburgh
- Chang, Yu-hung 1972 *The Hinghwa dialects of Fukien*, Cornell University
- Chang, Kuang-yu 1987 *Comparative Min phonology*, University of California, Berkeley

關於閩南話中效攝一等字的文白異讀

(論文提要)

樋 口 靖

一般說來，文讀音、白話音的區別是一種語言應用上的觀念，跟語音史上的文讀層、白話層的區別有所出入；因為後者是牽涉到語言本身的層次觀念

而不顧語言使用的具體場面。不但文讀音裏面往往有新層、舊層之分，白話音裏面也還有這種分別。廈門話中効攝字的讀音比較單純，所屬的各韻都有一套文白讀，就是：豪（一等）-o/-au，肴（二等）-au/-a，宵（三等）-iau/-io，蕭（四等）-iau/-io。在二、三、四等各韻裏，前者各自是文讀，後者各自是白話，這是比較沒有問題的。那麼，一等豪韻兩個讀音之中哪一個是白話呢？傳統的看法把-o做爲文讀音而把-au做爲白話音對待著。因爲，讀-au的字不止是它的數量較少並且絕大部分是口語常用的；相反，讀-o的字其數量多得多而且全部都是用於讀書的。對此，很多語言學者却以着重於語音系統的立場上把-au認爲文讀把-o認爲白話，這樣才會使効攝裏面的文讀韻母系統更加整齊，加上會使白話韻母豪-o、肴-a、宵-io、蕭-io的同攝異等的內在聯繫更加清楚。不過，廈門話豪韻裏讀-au的字大部分是來自上古音幽部一等的，是不外乎上古音的遺留，是屬於最舊的語言層次的。所以我看這個-au仍然是應該做爲白話韻母來處理才比較對頭。既然-au是白話，那我們不得不以-o做爲文讀，但是值得注意的是這個-o實際上包括新與舊兩層的語言層次的事實。最新的層次就是從中古音-au經過-o階段借移下來的真正的文讀音，舊層的-o是在更早的一段時期的文讀音。它的論據除了從廈門話音系本身找得出以外，還能在泉州話中得到的。在《彙音妙悟》中，部分効攝一等字重複屬於高韻（-o）以及刀韻（-o），全部効攝一等字屬於高韻；這些屬於高韻的是文讀音，屬於刀韻的是白話音。對於這種情形現代泉州音也是基本上一致的。可見泉州韻母至今還保留著-o與-o這種新舊兩層文讀音的差別，廈門韻母丟失了這個差別形成一個讀-o的文讀音。新的文讀音進來的緣故，泉州話裏舊的文讀音被降到白話音的地位了。泉州韻母一般比其他閩南話韻母還保守些複雜些，它的系統可能反映閩南話較古的語音情況，很有價值利用於研究古代閩南話。